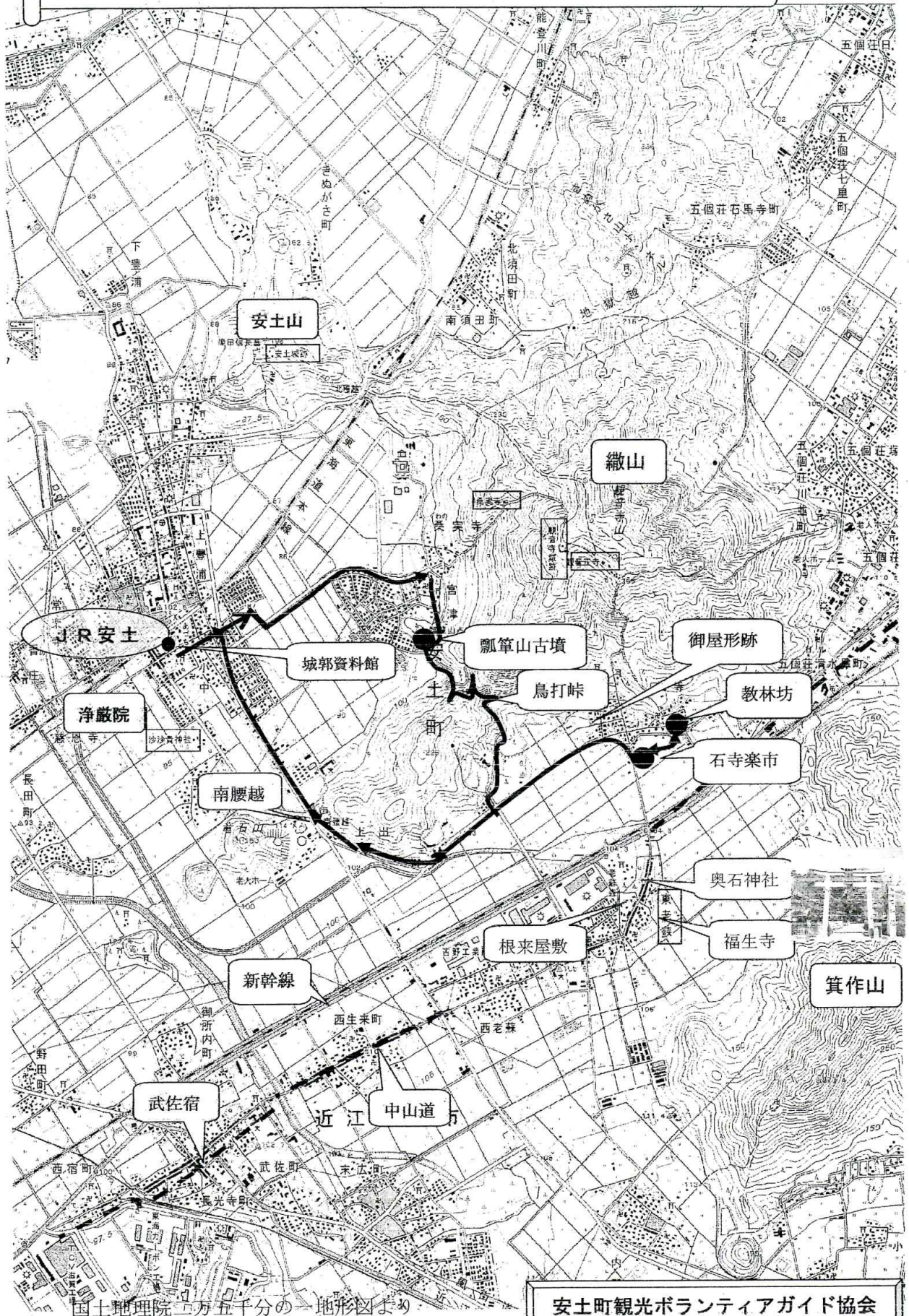


古道景清道と”紅葉の新名所教林坊”・ハイキングマップ



国土地理院二万五千分の一地形図より

安土町観光ボランティアガイド協会

古道景清道と”紅葉の新名所教林坊”

近江 新名所

安土町観光ボランティアガイド協会

スケジュール

JR安土駅集合（10：00）出発 10：10 ⇒ 景清道 ⇒ 10：45 桑實寺下 ⇒ 11：10
鳥打峠 ⇒ 11：40 天満宮・御屋形跡・楽座会館 昼食）12：40 ⇒ 13：00 教林坊
（拝観）14：10 ⇒ 14：20 石寺楽市 14：30 ⇒ （南腰越経由）⇒ 15：30頃
JR安土駅（解散）

参加費：600円（資料代・保険料等） 教林坊拝観料：700円受付時徴収

影清道（かげきよみち）

東近江市五個荘から野洲市の湖岸まで続く古道で、安土地区では、織山の南麓、石寺を通り、織山中の鳥打峠を越え桑實寺から上豊浦、小中の集落を経て浄厳院の門前を通る道です。かつて平安末期の武将平景清（平家の家人・佐藤景清）が平氏の復興を願い清水寺に参詣するため、尾張より京都に行く際に通ったことに由来するといわれております。あるいは主要道路を避けて通る「かげの京みち」からきているという説もあります。

「景清道」の逸話は断続的に北は関東地方、南は南九州まで各地に伝わっています。これは生まれた土地が関東で、源平合戦後日向に流されたことによるものと考えられます。その土地々によって伝承内容は異なり、例えば、隣の近江八幡地区では逆向きに観音正寺に参詣したと伝わっています。

袈裟斬り地蔵

上豊浦の村の中に首のない地蔵尊が安置されている。これは、景清が、桑實寺に日参している折節、その地蔵尊が、景清の心を探るため、

「鳥も通わぬ景清道で白状させたい事許り」

と俗謡に詠われている如く、景清道のとある山中で、容貌殊に端麗なる女性に化身し、景清を誘惑したが、景清はいささかも動じないどころか、さては妖怪の化身かと、腰に差していた太刀で、その女性が地蔵尊とも知らず、一刀両断のもとに袈裟斬りにしてしまったためであるという。景清のため首を落とされて地蔵尊は、

「己の首を探したりし者は、幸福に酬ゆ」

と、いまだにその首を探しているという。

織山（きぬがさやま）

琵琶湖の東、湖東平野にある標高432.9メートルの山で、別名観音寺山ともいわれています。山容が、貴人にさしかざす衣蓋（きぬがさ）に似ているので「織山」と名付けられたようです。一説には西側の中腹にある「桑實寺」の開祖、定恵和尚が中国より養蚕技術を持ちかえり、広めたことにちなみ、蚕が糸を散らす様から名付けられたとも伝えられています。山頂近くの南側には、西国三十三所第三十二番札所「観音正寺」があります。このお寺は、聖徳太子によって開山されたとも言われております。また山頂近くには、中世の近江守護職、近江源氏佐々木氏の居城「観音寺城」の重厚な石垣遺構が現在も残っております。

瓢箪山古墳(ひょうたんやまこふん) 国史跡 (道路サイドで説明)

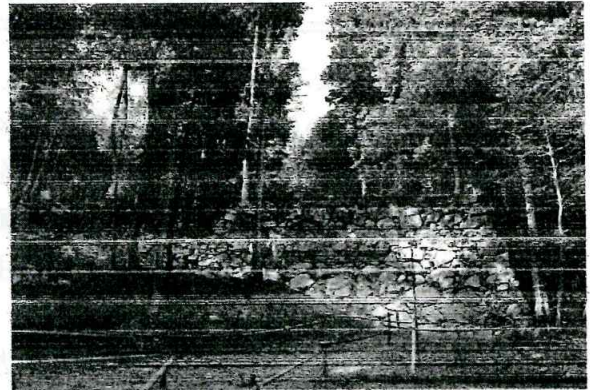
この古墳は滋賀県で最大級の規模を誇り、古墳時代前期の(約1600年前)に作られた、最古級の前方後円墳で、当時の蒲生・神崎両郡を支配していた古代豪族「狭狭城山君」に関連すると考えられています。昭和11年、土取り作業中、石棺が見つかったことを契機に、京都大学の手で発掘調査が実施され、その結果、前方部に二基の石棺、後円部に三基の堅穴式石室を持つことが明らかにされました。特に後円部中央石室からは、銅鏡二面、鍬形石・石釧・車輪石などの腕飾り類、管玉、剣・刀、銅・鉄の鏃、短甲、斧、鎌、やりかんなどの遺物が出土しました。その種類の多彩で豊富なことから、被葬者は相当な権力者であったと推定されます。

石寺城下町と御屋形跡 (御屋形～楽市間で昼食)

石寺は近江守護佐々木六角氏の居城がある織山の南麓に位置します。集落より少し高い場所には、城主の住まいであった御屋形跡や、これに関する地名が残されています。御屋形跡以外にも、石垣を積んで造られたたくさんの屋敷跡が残されていて、その一部は今も住宅地に利用されて

います。ここには六角氏の家臣団が集住していたものとかんがえられています。さらに石寺は、全国で初めて「石寺楽市」が設けられていたことが残された古文書でわかりました。近世城下町の商人町につながるものとして注目されています。

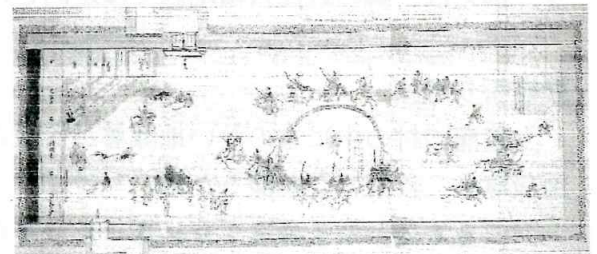
御屋形跡があるのは本坂(観音正寺の表参道)の西の山林です。今は天満宮が祀られている御屋形跡は、60メートル四方の敷地で前面は石垣で造成されています。裏手には観音寺



御屋形跡の石垣

城の曲輪に至る「追手道」とよばれる道が続いています。ここは「上御屋敷」という地名が伝承されていて、城主の館跡だったことを裏付けています。

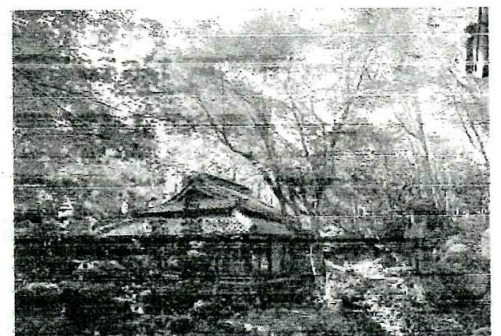
本坂の近くには「犬の馬場」という地名が伝承されています。「犬の馬場」は武士のたしなみとされた犬追物を挙行政した馬場を意味しています。このように本坂周辺は城主に関係する遺構や地名が集中しており、城下町の中核部を形成していたと考えられます。



観音寺城本丸にあったという犬追物図

教林坊(きょうりんぼう)

当坊は観音正寺の元子院の中で、現在唯一残る寺院です。庫裏と表門(板塀)並びに庭園が一式で残る貴重なものです。庫裏は、桁行六間半、梁間四間、入母屋造、茅葺(材料葺)で、周囲に棧瓦の庇が取り付く、子院の庫裏としては中規模のものです。様式から江戸時代前期に建てられたと考えられ、特に座敷は本格的な質の高いものです。表門は、庫裏と共に残る素朴ながら貴重な薬医門で、江戸時代後期の建物です。



教林坊本堂

庭園は、作風から桃山時代から作庭されたと考えられ、形式は「地泉鑑賞式」が適当と思われます。庫裏座敷の正面に池、背景に蓬莱山に相当する山を造り、池中には亀島に相当する岩島、池の左には鶴石に相当する。柱状の岩石、右手には現在は枯れている滝の石組みを配します。地元では小堀遠州作と伝えられます。

石、交差点の道標(右写真2枚)

本坂と旧道の交差する場所に二本の道標が建っていて、当時の主要な道路であったことを示しています

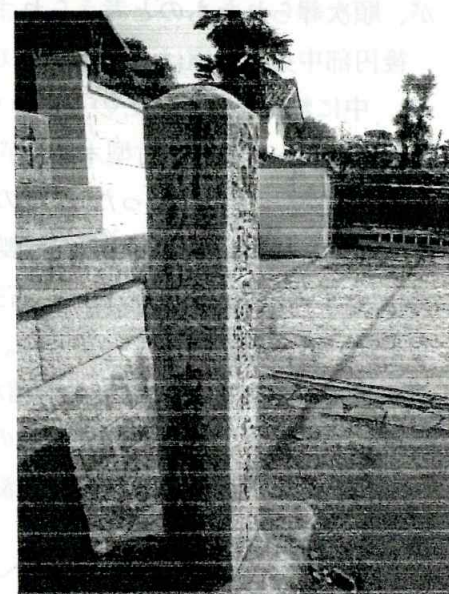


右の道標には以下の文字が彫られています。

(梵字) すくくはんおんし道 (まっすぐ観音寺道)

すく大つ 右 八まん 長命寺

左 くはんおんじ すくゑち川



弘化二年(1845)乙巳(キトミ)夏 後藤三之によって建立された、とある。中山道から観音正寺へ参詣する場合に通過する地点にあり、かつ午前中の道標の延長線上にある。従って、これに関する行先が刻まれている。

この道標の「すく」は、真っすぐのすくで、時間的な「すぐ」ではない。いずれにしても、この道標は見事な書体で刻まれ、道標の機能とともに県内を代表する一基であるとされている。

その筋向いに合うのが右の道標で、西国三十三所巡礼道を示している。結願の谷汲山華嚴寺まで十八里(72 km)とある。現在のような精密な地図もなく、案内書の不十分な時代にはこのような道標が要所に建っていて、これらの道標を頼りに旅をされたことであろう。

参考：南腰越(図書館前)の道標(右写真)

今回は通過しない

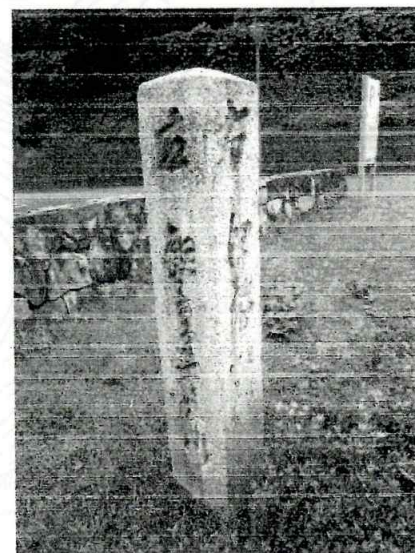
右 伊勢 日野 八日市

左 観音寺 愛知川

嘉永三年(1850)庚戌(カエイ)に建立されたこの道標は現在の位置より南の石寺への分岐にあったもので、峠が改変された時に廃され後に現在の位置に据えられたと思われる。

行先が近江の道標の特徴を表している。特に「伊勢」で、湖東に多い伊勢道であること示している。

この道標を左に行くと、先ほどの道標に至り、観音寺または愛知川に向かうことになります。かなりの道標が失われた現在、数少ない貴重な道標です。



瓢箪山古墳追加資料

墳丘の形は自然の地形を利用しながら整形した典型的な前方後円墳で、全長 134m、後円部径約 78m、後円部の高さ約 13mを測ります。墳丘上からは、円筒埴輪や、底部を穿孔した壺などが出土していますが、葺石や段築などは明確には確認されていません。

埋葬施設と出土遺物

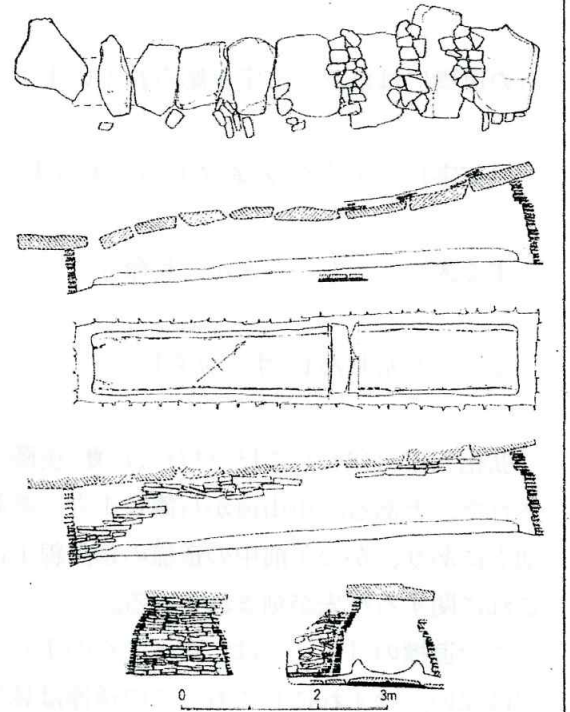
昭和 10、11 年に発掘調査が行われています。その結果、後円部（織山側）から主軸（東西方向）に並行して並ぶ 3 基の竪穴式石室が、前方部からは主軸に並行する 2 基の箱式石棺が発見されました。この古墳は一番立派な後円部中央に葬られた人のために造られたもので、その他の埋葬施設には中央に埋葬された人の近縁者が、順次葬られたものと考えられます。

後円部中央の石室は、長さが 6.6m、幅 1.3m、高さ 1.1m で、中に粘土を敷き、この上にコウヤマキで造られた長い木棺「割竹型木棺」が置かれていました（木棺は腐食して残っていません）。この中から被葬者の顎骨を始め、銅鏡、玉類、石製腕飾、武器武具類、農具など多くの副葬品が納められ、石室の上は 9 枚

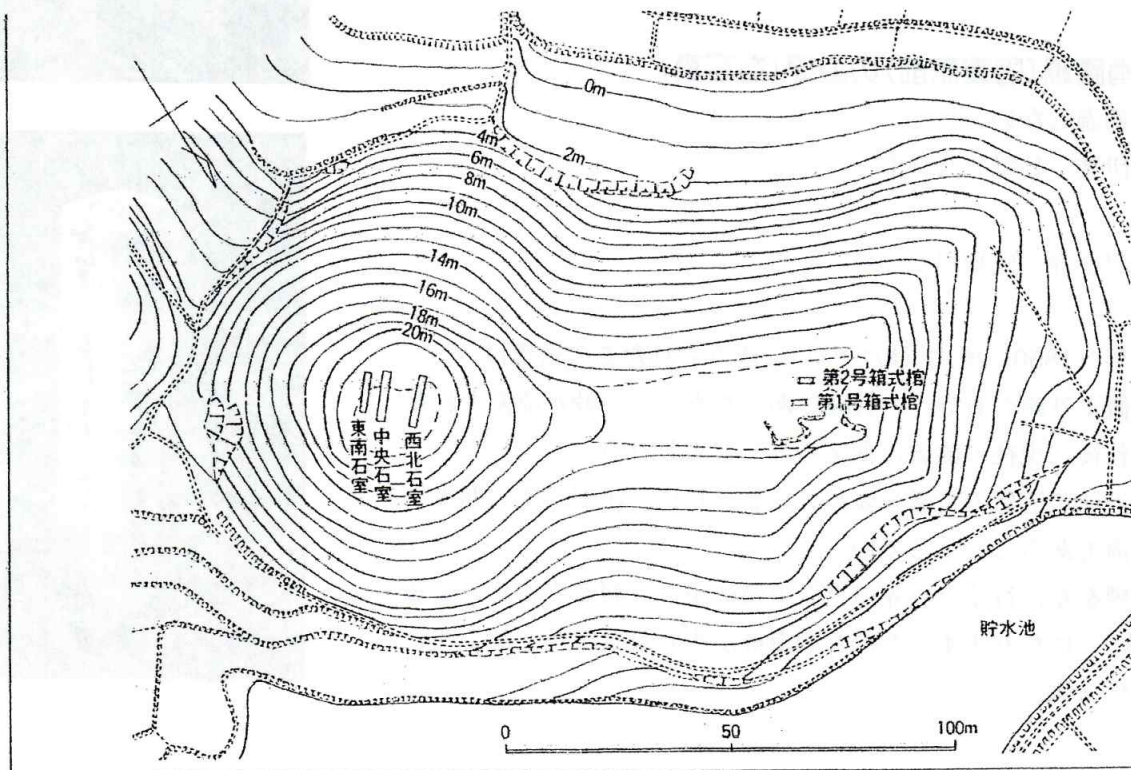
の平たい石で蓋がされていました。（安土城考古博物館に復元模型が展

示してあります）その左右の石棺からは小金具や人骨、前方部の箱式石棺からは玉類、石製腕飾などが出土しています。これらの副葬品の年代から、この古墳は 4 世紀中頃に築造されたものと考えられます。

（滋賀県教育委員会事務局文化財保護課発行 『学習シート NO. 028』 転記）



前方部中央の石室



瓢箪山古墳測量図